

# ヨーロッパ 欧羅巴への道

札幌コンセルヴァトワール院長  
宮澤 功行

## Overture [Adagio Cantabile]

山吹色の落ち葉が、歩道を埋めるウィーンを娘と歩いたのは昨年の晩秋の事だった。

もう道案内などいりません…とばかり先を歩く娘に『君が生まれる二年前に、この石畳をママとも歩いたんだよ!』と、少し感傷を込めて言ってみた。

答は、…『ふーん』のひと言。

どうも男はいつまでもロマンに浸り、郷愁に身を焦がすようだ。

翌、平成6年春、この子にとって七度目のウィーンを歩いた時、会話はもう自然と数年後の、そしてさらなる未来の話にかわっていた。

## 第一楽章 [Allegro appassionata]

想えば、18歳迄の世代の要請と、教育熱心な人達の国際交流への渴望に答える形でAOC C C (子供の為の海外交流演奏会)を提案してから私の渡欧は一気に加速されてきた。

渋谷香帆(17歳月寒高校)さん(注1)がブリュッセル王立音楽院オーケストラとピアノ協奏曲を共演し大成功を収めたのを始めとして、

札幌東高校から留学の阿部志津さん(注1)がこのオーケストラと今年、ヨーロッパ各国でピアノ協奏曲を共演決定までの出来事を限られた紙面で書く事はとても出来ない。

今や、一抹の感傷に浸っている暇もなく、欧羅巴と札幌をダイレクトで結ぶ数々の感動的なドラマは繰り返されている。

## 第二楽章 [変奏曲 Andante con moto]

(注1)文中の渋谷君・阿部君はPTNA Piano Competition 入賞者です

◎ヨーロッパでの演奏会と音楽大学での  
研修 (94年4月20日～5月6日)

このヨーロッパでの演奏会と音楽大学研修には札幌市で音楽を学ぶ先生と生徒、27名が参加した。

一行は国立ブラハ音楽院、ブリュッセル王立音楽院、パリの市立エコールノルマル、ウィーンの国立音楽大学とウィーン市立コンセルヴァトワールで研修し、参加者全員が各国音大教授の熱心な個人レッスンを受け、大変

勉強になったと思う。

演奏会は前回(92年)に引き続きブリュッセル弦楽四重奏団とシュターミッツ弦楽四重奏団からの依頼に答える形で四回演奏(プラハ・ブリュッセル・リエージュ等)。

特に、王立音楽院ホールでの演奏会は『今日は芸大の奏楽堂で演奏する様なものだから失敗は許されないよ!』と、過剰なプレッシャーを受けての演奏会であった。

終演後、来年の演奏契約と欧羅巴発のCD制作が確定し、王立音楽院が開いてくれた打ち上げパーティで同行の参加者と共に喜びを分かち合う事となった。

▼ブリュッセル王立音楽院ホールの演奏会を終えて



4 エコールノルマルでラタルジェ教授を囲んで

### ◎スウェーデン国際コンクールへ札幌から審査員&受験者として参加('94年6月15日~)

これはスウェーデンのK I L市で世界各国から多数の参加者(音大教授・生徒・学生等)を集めて開催された、「International Piano Festival in Sweden」の催しに参加した事である。スウェーデンの主催者からPTNA会長の羽田孜氏と専務理事の福田先生宛に、私を審査員と講演者に派遣して頂きたい旨の委嘱状が届けられ、身が引き締まる思いでの参加となった。

この国際コンクール部門へ札幌コンセルヴァトワールでピアノを学ぶ学生3名が直接参加、3名ともディプロマを受賞し、私は国際コンクール審査員として内面的な実体験を踏む事が出来、とても勉強になった。

### ◎EPTA国際学会でピアノ教育についての講演 (~'94年6月28日)

これは第16回EPTA学会で私の論文『子供とピアノ~私の実践教育からの提言』(注2)に対し発表の機会が与えられ世界各国のピアノ教授や先生の前で講演を行った事です。

内容は教育の現場でいかにEducation・Dynamismが大切であるかを述べたものです。

(注2)興味を御持ちのOur Music 読者の方は御送り致しますので御一報下さいませ。

## 第三楽章 [Fughetta Vivo]

ところで今は昔、私が青函連絡船に乗って東京へピアノを習いに通った時間が片道24時間、それが現在パリ~成田11時間; 欧羅巴各国から私の家迄22時間です。

何と素晴らしい変わりようではありませんか! (しかも円高です)

コンピューターピアノやサイレントピアノがヒットする現在、音楽を指導する側こそ変わって行かなくては?…と、“ふと”考えさせられます。

それにしても私の国際交流に熱い想い出は

## Coda [Langsam]

『森と湖の国スウェーデン』を後にする道すがら『12年前にデンマークから船でアンデルセンの故郷を訪ねたのを覚えているかい?』と聞いてみる。

『いや、なーんにもおぼえてない』と娘の答。

本当に、何も覚えていないらしい。

そこで『しかし、いつ来てもヨーロッパはいいねえ!!』私は思いっきりこう切り出してみた。

少し間を置いて『いや、日本が最高よ!』



▲ブラハ城を背に参加者一同



▲ブラハでの演奏会を終えて

尽きません。

今回もカリフォルニアからK I Lへ通訳に駆けつけてくれた広瀬由佳君や、ヤン・エキエル教授の仏蘭西語通訳の為にブリュッセルから来てくれた岩崎麻野君、ウィーンでの川上君の活躍等々、元生徒達が私を大いに助け励ましてくれました。

そして、そのどれもが厚い友情と信頼によって築き上げられた生の素晴らしい人間ドラマとして参加者に無言の影響を与えてくれたようです。

と、娘。

この相変わらず続かない会話にもめげず『人間は旅をしなければ駄目になる』と言うモーツァルトの言葉を忠実に実行している私。

きっといつの日か、生徒達の心にこれらの旅が何か語り始めるのを夢見ているのだろう。

『そうか! あれは本物の音楽を求め続ける旅だったのだ』と、感じる時を私はただひたすら待っていたと思う。